

第3回 西アジア分科会 議事録

開催日時：2007年1月26日 15:00～17:00

場 所：東京文化財研究所 国際研修室（4階）

出席者(敬称略)：前田、入澤、高橋、八尾師(分科会委員)、浅野、勝平(文化庁文化財国際協力室)、齋藤、守山、細川(外務省)、片山(国際交流基金)、山内(東京文化財研究所)、豊島、延近、田代(コンソーシアム事務局)

■ コンソーシアム活動報告 [東京文化財研究所 山内和也]

報告の概要

- 第2回運営委員会および総会、設立記念シンポジウムの開催(1月16日)について。
- 海外の文化遺産保存協力推進法第6条の基本方針に対する提言の作成について。

- ・ マスコミによるシンポジウムの反応はありましたか。報道に対しては、事前にきちんとメッセージを伝えていく必要があると思う。
- ・ 総会の時に配布された「日本の実施した文化遺産国際協力プロジェクト一覧(暫定版)」には科研の情報ははいっているのか？
 - 7月のデータベースにはいれたいと考えているが、今回は間に合わなかった。
- ・ 日本学術振興会は現在コンソーシアムにはいっているのか。はいついていただいて、情報をもらったかどうか。
 - 現在ははいっていないので今後検討したい。
- ・ 運営委員会進行については、重要な討議事項については事前に委員にメールなり文書なりで知らせておいて方がよいのではないか。
- ・ コンソーシアムの会員も、どのような人々をその勧誘の対象としているのかわかりづらいところがある。今後各分科会でこの件について議論していく必要があるのではないだろうか。

■ アフガニスタンにおける今後の事業計画について [東京文化財研究所 山内和也]

報告の概要

- 2003年から始まったバーミヤーンにおける日本ユネスコ信託基金事業だが、2007年12月で第2フェーズが終了する。バーミヤーンの遺跡保護については、現在ようやくスタートラインにたったところであり、将来的にその保存活動をアフガニスタン人によるものを開始するにあたって、専門家としては、第3フェーズを期待したい。第3フェーズの計画だが、現在バーミヤーンは世界遺産であると同時に危機遺産リストからどのようにはずしていくか、というのがメインとなる。また、理想としては、この第3フェーズにおいては、アフガニスタンに移行する。
- 今後の活動としては以下のことが考えられる。①壁画の保存の継続②マスタープランの実施とそのための人材育成③東西仏崖について、奥壁の補強。④破壊された仏像の破片をどのように保存していくかという問題。⑤遺跡の保護や価値付けのための基本的調査としての考古学調査の継続。⑥第1フェーズ、第2フェーズですでになかった、崖自体の破損状況の把握と、その保存の問題。⑦アフガニスタン人による保存実施にむけて、アフガニスタン人のための文化遺産保護のワークショップの開催や研修。⑧バーミヤーン保存事業の広報。

- ・ バーミヤーンに住んでいる人々の文化遺産に対する意識の改革については、バーミヤーンの地方政府にとっても大きな課題である。現在は、「バーミヤーン文化遺産保存協会」というものを設立して、住民の啓蒙にのりだそうとしている。そのための第一歩として local of media を立ち上げるという計画もあるときいている。そのような動きを促進していくためには、技術的な人材育成を考えなければならないだろう。

- ・ イスラーム社会のなかで行われている偶像修復は、シーア派などの宗派の違いはあると思うが、サウジアラビア、イラン、パキスタンなどの第3諸国から、どのように思われている可能性があるのだろうか。

→人によると思うが、イラクにおいても、イスラーム以前のものが保存されているし、イランでもペルセポリスは人気がある。サウジアラビアの人はイスラーム以前の遺跡の保存に否定的だと聞いている。しかし、タリバン政権も最初は博物館を再開せよ、という人間もあり、必ずしも文化遺産に対して全否定ではなかったという。

- ・ バーミヤーンでは、最初に現場へはいった時、周辺住民に対して「この遺跡を保存したいか」という意志の聞き取りを行っている。当時、住民の人々は「ぜひ守りたいし、破壊された仏像も復元してほしい」というようなことを述べていた。

- ・ 昨年の9月末から1ヶ月ほどアフガニスタンにて調査したが、そこで痛感するのは、アフガニスタンは文化遺産の宝庫であるにもかかわらず、これら文化遺産についての知識がないということである。現地にいま本当に必要なのは、教育であるように思われる。実際にアフガニスタン政府にも調査内容は還元してほしいと依頼されている。特に、現在のアフガニスタンはイスラーム以前の歴史の知識が不足しているので、そこを支援することが、文化遺産保護教育に通じると思っている。また、歴史を教えられる人材を育成することが急務かと思っている。

私たちの活動は、2003年、現在まで仏教研究のなかでアフガニスタンにおいて注目されていなかった地域において、カメラマンにより仏教遺跡が発見されたことに端を発している。また、同年にロンドン大学のシムス・ウィリアムスというバクトリア語の碑文研究者によって、1976年タンレサファラク村出土の碑文が解読された。その碑文には「イスラームの勢力がはいつてきた時にストウーパが建立された」とあり、これは、イスラームと仏教の共存していた時代があったという可能性を示している。

- ・ バーミヤーンにおいては、日本ユネスコ協会連盟が建立した「バーミヤーン教育文化センター」を拠点として活動しているが、今年から、このセンターにおいて日本ユネスコ協会連盟が寺小屋活動をするという話を聞いた。また、バーミヤーン州がローカル・メディアの立ち上げを目指している。このような支援活動が続けば、アフガニスタンの教育支援にもなると考えている。

- ・ ユネスコの日本信託基金については、19年度については、150万ドルということになっている。現在まで日本ユネスコ信託基金は30件以上あったが、現行の事業のなかでは、アンコール遺跡保存事業とこのバーミヤーン保存事業が2大主要事業である。今後とも一層の効果을期待したい。

■ アフガニスタンにおける国際交流基金のこれまでの活動と今後の計画 [国際交流基金 片山克人]

報告の概要

- 平成 19 年度のアフガニスタンの日本大使館より、カーブル市内にある仏教遺跡の分布図を作成するための日本人専門家派遣の要請はきている。経緯として、平成 17 年度に専門家派遣の依頼があったが、治安状況から断念したという経緯があるため、前向きに検討している。また、国際交流基金だけではカバーできないかもしれない規模なので、他のユネスコや東京文化財研究所との協力を考えている。

- ・おそらくカーブル市内の仏教遺跡調査が急がれているのは、背景としての都市開発によるものもあるのではないかと。
- ・確かに、近年のカーブルの都市拡大は著しい。一方で、現在は市内の遺跡についての情報がまったくない状態なので、遺跡を保護することもできない。一番求められているのは台帳であるが、治安の問題があり、実施が難しい。
- ・イスラームの建造物については日本はやらないのか。
 - 当然やる必要があると思う。市内の主要イスラーム建造物はやる必要がないと思うが、特に仏教のみに限る必要はないと思う。
- ・日本から専門家を派遣する場合は、どれくらいの期間になるだろうか。
 - 治安問題を考えたら、そう継続的に一箇所を長くできない。
- ・人材の育成については短期間では難しいのではないかと。
 - 1ヶ月調査して、まとめるというものではなく、短期間の区切りをつけて、中期的な目標をつけて達成をしていくしかないと思う。
- ・今までは、遺跡の分布調査をするような形の協力がなかったもので、このようなプロジェクトは非常に喜ばれている。実際、ドイツはカーブル市内の建造物に関しては、いくつか実施しており、それはアフガニスタンから非常に評価されている。もちろん、カーブル全体の文化遺産保護について考えるためには、ドイツが調査をした結果を統合していかなければならないと思う。
- ・アフガニスタン政府の協力要請はどこからでているのか。
 - 文化青年省
- ・カーブルの専門家は何人くらいか。
 - 日本人は2名ほどで、アフガニスタン人は5～6名となると思う。むこうの政府との協議次第であろう。
- ・カーブルの仏考古研究所などは、仏外務省の予算でおこなわれているが、フランスによるアフガニスタン研究は、発掘が主要であり、また現在も発掘が主要である。しかし、現在は将来的保存を考えて、分布調査などもする必要であるのではないかと。
- ・本当ならば、フランスが以前発掘したものについては、改めて何を保存するのか、という検討が必要ではないかと。

■ アフガニスタン公文書館保存事業 [東京外国語大学 八尾師 誠]

報告の概要

- 年末から年始にかけて、カーブルにおいて公文書館の保存に係わる調査を実施した。
- 現在のプロジェクトは、2009年までの7年間プロジェクトである。
- プロジェクト内容だが、まず公文書館の所有資料について調査をし、その後整理をおこない、保存をするという予定である。2006年には、公文書館自体に対する支援として、公文書館内の資料の分類を始めた。まず、試験的に新聞類の整理をおこない、現在PC上でデータを整理している。公文書館には、新聞101タイトルが保管されており、いくつかの新聞は歴史的に非常に面白いもので、これからその価値を見極めていくところである。
- いくつかの公文書については、資料集などをつくり公表したいと思っているが、まだ討議中である。

- ・資料のマイクロフィルム化は、現在資料を整理している状態なのに、本当に必要なのか。
- ・以前、2004年にイランが機材供与をおこなっているが、供与された日から機材が使われていないことがあった。その後、また防虫の機材をイランは供与したが、それもガス・電気の問題があって使われていない。

■ シリア調査報告 [東京大学 西秋 良宏]

報告の概要

- シリアで、土器がでてくる前の時代から、土偶が発見されており、現地で保存修復ができなかったため、昨年11月許可がでて日本で修復することになった。その際、ダマスカス国立博物館の保存官を研修で招聘し、現在東大の博物館で研修を受けている。土偶の修復は、1年半かかる予定であるが、その間も数人シリアから専門家を研修のために招聘する予定である。

- ・ 招聘する経費はどこからでるのか。
→2年前は国際交流基金からいただく予定であったが、土偶持ち出し許可がでなかったため、話しが消えてしまった。なので、現在は科研で招聘している。

■ 中央アジア活動について [東京文化財研究所 山内 和也]

報告の概要

- タジキスタンの日本ユネスコ信託基金で、世界遺産アジュナ・テペ仏教遺跡保存の事業が行われている。現在埼玉大学・東京文化財研究所・イタリア人のフリー土構造物の保存修復専門家が活動している。アジュナ・テペは7～8世紀の遺跡であり、アフガニスタンの仏教遺跡との関係を考えても重要な遺跡である。また、シルクロード上の遺跡であること、加えて13mの巨大な涅槃像が存在することからも、その保存修復が重要視されている。土構造物の保存は非常に難しい問題で、現在試行錯誤している状態である。現段階では、煉瓦を保存し、屋根をかけるという方法を考えている。

- ・ この遺跡を日本が保存することの重要性はなにか。
→外務省の決定だが、シルクロード上の遺跡であること、仏教遺跡ということ、加えて遺跡の規模などを考えてのことだったと理解している。

- ・ シルクロードの道そのものを世界遺産とする場合、日本ははいるのか。
→シルクロードの終点としては入ると思う。シルクロードの登録については、海外においても国際会議がおこなわれているが、まだ具体的な登録の動きはできていない。

■ コンソーシアム活動について [東京文化財研究所 山内 和也]

報告と概要

- 第3回企画分科会(11月24日)、第4回企画分科会(1月17日)開催報告
- 第3回東南アジア分科会(1月25日)開催報告
- コンソーシアムSNSが1月25日から始動
- コンソーシアムSNSが1月25日から始動

■ 次回会議について

次回は、

日時: 3月29日(木) 15:30 ~ 17:00

場所: 東京文化財研究所 第一会議室(地階)

以上